

---

# 黒い眠り姫と恋しましょう

弘道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒い眠り姫と恋しましょう

### 【Nコード】

N7032Y

### 【作者名】

弘道

### 【あらすじ】

三月二十八日、永眠しました。

目が覚めると知らない人たちに囲まれてました。

黒のお嬢さんってなんなんだよ！

転生ハートフルラブストーリーになったらいいね！な異世界物語。

追記：なぜかガールズラブタグがついていました。ガールズラブだ  
とおもってお気に入り登録した人すみません。この小説のカップル  
は純粋な男女です。

## 永眠

ー猫が、居た。

道路の真ん中に居たその猫を助けようと道路へ飛び込んで、私の視界は真っ赤に変わった。

あ、死んだ？

心に浮かぶ思いはその四文字で、人間って死ぬ時こんな思考があっさりしている物なのね。

そう他人事のように思った。

ああ、体が重くて冷たい。

来世は猫になりたいなーふかふかの黒いやつー。

あーあ、どっちにしる次に横たえてんのは白いベットのの上だろうなー、病院行きたくねえーあそこ薬臭いんだよねー

ー一回検査入院したからもう二度といきたくないわー

そんな事を考えながら、三月二十八日、緒方小夜は永眠した。

黒のお嬢さん？そんな事より笑っていいですか？

「で、なんで私はここにいるんですかね？」

たった今さつき車に轢かれ死んだ？はずの私は目が覚めると大広間  
みたいなのこのど真ん中に居ましたー。

目の前にはスツゲーグラマーで真っ赤なドレスをきた美人で金髪のお姉さんと、なんか槍やら剣やらを持った男の人たちがうじゃうじゃ、そんでヒゲのジジイと銀髪赤目のイケメン（苦笑）が立ってました。

小説的にいくと転成トリップってやつう？

…自分、キモイ。鳥肌立った。ギャルゲーっぽい喋り方似合わねー。

心の中でぶつくさ言いながら周りの観察をする。

ここで文頭のセリフへ戻る。

あーあ、せつかく生まれ変わったら気ままな猫生活しようと思ってたのよーなんでしんでねえーんだよ、なんなんだよこれ、コスプレ集団？

…ドッキリか？

いや、ドッキリにしては死ぬ時の感覚がリアルだったなー。

夢オチだったらいイナー（\*^^\*）

なんて現実逃避をしまくりです。

するとチョーロー（ヒゲのジジイ。さっき私が命名した。）が口を開いた。

「ようこそ、黒のお嬢さん。貴女には是非陛下の嫁になっていただきたく…」

「は？」

すると隣のイケメン（苦笑）が口を開いた。

「いや、だから俺の嫁になって欲しいんだが…」

「ハッ」

お分かりいただけただろうか。

同じ『は』にもかかわらず、最初の疑問系と次の嘲笑を！これぞ『は』の二段活用である。

なんて現実逃避をしていると隣の魔女（それっばいよねー金髪美人ー）が話かけてきた。

…ちなみにイケメン（失笑）は部屋の隅で「初めて嘲笑された…」と呟きながら落ち込んでいる。

これだから坊ちゃんは。

「初めまして、黒のお嬢さん。私はこの国の魔女、ローザンヌよ。貴女をこっちに召喚したのは私なの…ごめんなさいね、でも、絶対不自由はさせないわ。約束します。」

ほーらみるーやっぱしこの人魔女じゃん！私の予想マジばねえ！

…今なんて？召喚ったか？

「その、召喚？されたから私は死んだんですか？」

一応聞く。聞くは一時の恥！

「えっ、いや、召喚の条件で異世界で死ぬ直前の娘、ってなってるのよ！その中で黒のお嬢さんに当てはまるのが貴女だっただけで！」

なんなんじゃそれ、老衰直前でもありなのか？

…それは娘さんに入らないのか。

「黒のお嬢さん、ってなんですか？さっきから連呼してますけど」「するとチヨロー（私命名）が説明に入った。さっきから話すやつ立ち替わりしやがってめんどくせえ。ひとりで話せよ。」

「黒のお嬢さん、とは異世界で最も陛下の嫁にふさわしいお嬢さんの事でな、陛下の即位する直前に召喚するんだがその召喚の直前に異世界で死ぬらしいんじゃない…そしてその娘たちは全員漆黒の髪に漆黒の瞳なのじゃよ…ああ、自己紹介がまだだったな、この国の神官

長のチヨー・ローじゃ。気やすくチヨーとよ」「ぶふっ、」「んでくれ  
…どうした！苦しいのか!？」

うつむいて口を押さえ込んで小刻みに震える私を見て周囲が慌て出  
した。

すいません、でも、チヨーローって呼んでた人の名前がチヨー・ロ  
ーだったら笑いませんか？

## 就職氷河期が悪い。

「くっ、いやっ、ぷっ、その、大丈夫っでふふくっす！」

爆笑しながら答えてると皆か怪訝な顔をして見つめてきた。

槍をもったやつなんか陛下（爆笑）に「本当にこれが黒のお嬢さんですか？っていうかこんな嫁にもらって大丈夫ですか陛下？」なんて言っている。

いや別に私陛下の嫁（ぶふっ）になる気は無い。

いや、まてよ、別に断わる理由も無いのである。

だってさ、さつきからイケメン（失笑）って連呼してるけど、多分この状況じゃなかったら思わず反射で写メってしまうくらいには顔が整っている。

しかも、王族の嫁である。

確かに王家とか大変かもしれないけど、元の世界では私は就職氷河期にさらされ大学四年になったにもかかわらず就職先がまだ決まっていらない。

…永久就職…

これは魅惑的すぎる響きである。

しかも、悲しむべき事に私は彼氏いない歴〓年齢である。

…そんなにモテないような顔してるかな…

なぜか友人もできないというひとりぼっち体質なのである。

さみしい…なんて言うと思ったかばーかばーか！！

別に悲しくなんかないんだからね！

取り合えず、前向きに検討してみよう。なんか他にも王族にならずに就職できる方法があるかもしれないし。

羽毛ぶとんって最強ですよ。

「で、本当に私が嫁でいいんですかね。召喚もつかいしたらもつといい娘いっぱい捕まえられるんじゃないですか？」

『前向きに検討します』的な事をほのめかす発言をしたら何故か結婚することになりました。

何故こうなった。

「とっ捕まえるって…」

横で苦笑しているのはイケメン（苦笑）です。

本名をアシル・クロード・バルテレモンというそうです。

今度から足って呼んでやろう。

部屋に案内されましたが、えらく豪華ですね。きつと蓮 みたいなのが事業仕分けすることになったならこういうところから削るべきだと思います。

「もう夜だ、ゆっくり寝…」「うひゃっほーい！」「て…は？」

足の言うことは聞いてませんでしたサーセン。

だって！だって目の前にぶつかぶつかの羽毛ぶとんがあるんだもの！！

家より二倍はあると思われる分厚さ、飛び込んだ時の体の沈み加減…此処が樂園なのね！そうなのね！

絶妙な柔らかさと暖かさにつつらうつらし始めちゃったぜ。

何 が 悪 い ！

そのまま意識を闇に手放した。

## 独白

子供の頃からずっと、「殿下は異界から黒のお嬢さんを王妃に迎えてこの世界にさらなる発展をもたらすのですぞ」といわれ続けた。

幼い時分からの刷り込みなのか憧れなのか、それとも権力のために側妃になりたがる者たちを見てきたからか、私はずっと黒のお嬢さんがくるのを心待ちにしていた。

愛情なのか義務からか、自分の心なのに分からないこのもどかしさはどうしたらいいのだろう。

それでも、目の前でこてん、と布団に倒れこんで、しばらく黙っていたかと思えばはしゃいだりする、その様子を見ていて頬が緩むのはきっとこの娘に好意をもっているからなのだろう。

このはしゃぎようは私以外知らない。

胸を支配する優越感に浸る。

突然おとなしくなったからどうしたのかとベットへ駆け寄ると、黒のお嬢さんはすやすやと吐息を立てながら眠っていた。

眠りを妨げないよう、なるべく音を立てずにランプを吹き消す。

いきなり全く知らない場所に連れてこられて疲れてたのか。

罪悪感が思考を蝕む。

でも、見知らぬ世界の見知らぬ男の前でここまで気持ち良さそうに寝れるのは神経が図太いのか、私が信用されているのか。

文献によるとこれまでやってきた黒のお嬢さんがたは皆、到着していきなり取り乱したり、泣き叫んだり、少なくとも悲痛な顔をしていたと言う。

この娘が少しでも苦痛を感じていないといい。

いや、私が苦痛を感じさせないよう、精一杯頑張ろう。

一度ベットから抱き上げ、布団をかけ直そうとするが、服をつかまっていたので、まあ、いずれ夫婦になるんだし、と自分の良心に言い訳をしながら同じ布団に潜り込んだ。

こんなに小さくて細いのに、君は何故こんなに強いんだろうな。

「…おやすみ、良い夢を。」

咳いて、瞼を閉じた。

売られた喧嘩、高価買取中です…？

朝？目が覚めた。

朝？なのは目の前が真っ暗だからである。

何かが目の前にある事はわかる。

ただ全身がそれがなんなのか、理解をするなど警報を鳴らしている気がする。

だって、暖かくて心臓みたいな音がしてゆっくり呼吸を繰り返すものが朝目の前にあつたら誰でも現実逃避したくなるってもんだと私は思う。

むしろ今現実逃避真っ只中である。

ちくしょう良い体格しゃがって！

あれか？筋肉と骨フエチに対する挑戦か？

ぺすぺす。

…別に変な意味はないよ、ただ目の前に良い筋肉があるんだから叩きたくなるじゃん…

起こさないよう細心の注意を込めながらはた…「う…ん」「う…わ起きた？起きたのか！？」

「あ…ん？ああ、悪いな、目が覚めていたのか。」

寝起つきつのつ、ハスキーボイス！

くっそ心臓が口からでそう！

反則だー反則！

やっと足の身体が私から離れて落ち着け…「ちゅっ」

っっ「ぎゃあああああ！！？」

こいつ、デコチューしやがった！

男に耐性が無い私にたいする挑戦か！よろしい売られた喧嘩は買ってやる！！

目の前で「目覚めのキスだが嫌だったか？どうせこれから夫婦になるのだから額のキスくらい…」とかいいながら大慌てしてる奴の口に向かつてキスカましてやりましたよ！

ずれて唇の端と頬の間になりましたけど！

ガチャ…

「……………ナカノヨロシイヨウデ…失礼しました！」

……………あれ、これ手段をミスった？

おはよう、足。

何かに身体を叩かれている気がして目を覚ますと、腕の中に黒のお嬢さんがいた。

いや、いなかったらおかしいんだが、でもやっぱりこの腕の中にすっぽりはいるかんじとかこんな細いのになふわふわしてる身体とかを抱いてると思うと嬉しい。

だらしな顔にならないように気を引き締めながら身体をゆっくり離す。

あまりに名残惜しいので額にキスを一つ落とすと、いきなり叫ばれた。

額へのキスひとつでここまで騒ぐなんてどれだけ男に耐性が無いんだ、と思うが、でもそれがうれしい。

しかしあんな大きな声で叫ばれたら従者が飛んでくるんじゃないか？

あまりの慌てように申し訳なくつらつらと謝罪を並べるが、あまり聞いていないようだ。

…そんなにショックだったのか…。

落ち込みかけているといきなり唇の横にキスされた。

は、へ？

とつぜんの事に思考がついていかない。

いきなりドアが開いた。

さっきの叫びで慌てた従者が飛んできたが、ちょうどキスされていたところだったので取り込み中だと思われたのかそそくさと退室して行った。

きよとん、となにがあったのかよくわからなさそうにしている黒のお嬢さんを見て和んだのは内緒である。

嗅ぐなあ！

うわあああああ……。

やっ っ て し ま っ た ！

なんで、よりによって、

キスするんだよ！

やばい死にたいなんでこの人若干口の端ひくついてんだよそんなに私にキスされたのが嫌だったのかいいじゃん唇うばってないしこちとら初めてキスされてテンパってたんだよファーストでこキスの代償じゃボケええええ……

泣いてもいいですかね。

ふて寝してやる！

ベットに飛び込みごろごろする。隣のイケメンはクスクス笑い始めた。

喧嘩売ってんのかああ！

あぶねえ殴りかかるところだった。これ以上喧嘩買ってたらさらにひどい目に遭う。絶対そうだ。断言してやる。なんなら連帯保証人に母親推薦しとく。故人だからダメか。

もう知らね。おやすみ。

「悪いな、黒のお嬢さん。もう起きて朝ごはんにする時間だ。…いや、もう昼かな。」

寝かせてくれませんでした。

だからってなんでお姫様抱っこするの！！死ぬわ！おまえ男性と付き合った事の無い乙女をなんだと心得る！

もうやだこの人。顔面爆発すればいいのに！

「なんでそんなに顔が赤いんだ？…ああ、昨晚風呂に入らなかったのにわたしが近くに居るのが嫌なのか。…安心しろ、一晩くらいなら匂わないし汚ないと思わないから大丈夫だ。」

「匂いを嗅ぐなあ！！！」

馬鹿かこいつ！てかいわれて気づいたわボケ！

「いいから取り合えずおろせ！！！」

そのあと無事下ろしてもらい、風呂へ入りました。

風呂へ入っている間ずっと正座をしまっていて貰いました。

侍女の人に風呂に入れられたのは恥ずか死にしそうでしたが、ボデイケアとかしつかりやってもらったので肌すべすべです。

なるべく時間をかけてやって貰いました。

何分くらい掛かったかって？

……イケメンが立とうとして盛大に転び、そのあと三十分くらい痺れが取れなくなるくらいまでは入ってましたよ、ふふふ。

これは拷問だと思っただが。

あ、え、は？

今、キスされたか？

どうしよう、こんなに嬉しいのは久しぶりだ。

顔が緩まない様に必死でこらえるが絶対にこらえ切れてない自信がある。

はっきり言おう、今なら死ねる！

嬉しさに身悶えをしていると目の前で震えていた黒のお嬢さんがいきなりベットへ行こうと身じろぎした。

もう一回添い寝をするのもいいかもしれない…

激しい誘惑と一緒にベットへ入りかけるが、そろそろ執務に戻らないと宰相に怒られるし、それに黒のお嬢さんがお腹がすいていないかも気になる。

黒のお嬢さんはベットへ飛び込み、ごろごろと転がっている。

その様子が子供の様に愛らしくてつい抱き締めようと手を伸ばすけれど、朝の食事を抜きにするのも体に悪いだろう、と今まで考えもしなかった事を思う。

たぶん食事を取らないと体に悪いなんて考えたと知られたら、今まで私の世話をしてきた奴らがびっくりするだろうな、とその様子を考えるといたずらを思いついた子供のときみたいに笑ってしまう。

おっといけない、考え事をしていたら黒のお嬢さんが目を閉じてしまった。

「悪いな、黒のお嬢さん。もう起きて朝ごはんにする時間だ。…いや、もう昼かな。」

それだけいって、さつき伸ばした腕をそのまま黒のお嬢さんの方へ伸ばし、姫抱きにする。

別に姫抱きにする必要はないのだが、腕を引つ込めるのもかつこ悪いし、このまま言い続けても黒のお嬢さんは起きないだろうと思うたからこうしただけである。

…いや、下心が無いかと聞かれたらはいと答えるしかないのだが。

顔を真っ赤にしてジタバタしているお嬢さんを見ると心の底からやっつてよかったと思う。

それにしても姫抱きぐらいでそんなに恥ずかしいか？

「なんでそんなに顔が赤いんだ？…ああ、昨晚風呂に入らなかつたのにわたしが近くににいるのが嫌なのか。…安心しろ、一晩くらいなら匂わないし汚ないと思わないから大丈夫だ。」

すすすんと頭に顔を近づけ匂いを嗅ぐが、本当に体臭はしない。そ

もそも毎晩風呂にはいるのなんて王侯貴族くらいだ。

「匂いを嗅ぐなあ……！」

しかし怒られてしまった。なんでだ。

「いいから取り合えずおろせ……！」

そんなに嫌だったのか……しぶしぶ降ろすが少々……いや、結構名残惜しい。

残念に思いながらゆっくり降ろし、侍女を呼んで風呂の用意をさせる。

侍女と風呂に入るのを嫌がっていたが、最後は納得してくれた。

彼女は風呂に入る前に『正座』をする様に行って、やり方を細かく指示して行ったが、これは人体の構造を考えると絶対おかしい座り方だと思っただが……っ！

三分目で既に足の感覚がおかしい……！頼むから早くでてきてくれ！

結局彼女が出てきたのは一時間半後、アシルが気を遠くし始めた頃合いであった。

心の折れる、音がした。(前書き)

今回は、ひたすら「ご飯に文句を言っています。そういっのはいや、  
って人は読まないで下さい。」

心の折れる、音がした。

その後も心ゆくまで足の足を虐めたおしているとご飯の準備ができたと言われた。

そういわれればお腹が空いた気がする。

あー、なんかアジの開きと味噌汁が食べたい気分。ご飯は固めでたくあんつけて欲しい。

…よく考えたらここは異世界だ。

異世界じゃ日本食食べねえじゃん。

え…あいあむじゃぱにーず、らいすいずまいらいふ。

のおらいす のおらいふ！

拙者白米がないと生きていけないでござる。

…まあいい、ここは妥協しよう。いつか米を見つけ出すから。

それより、どんなご飯が出るんだ…青かったり蛍光色だったり光ったりしたら拗ねるぞ、むしろ食べねえぞ。

…どんなご飯だろ…だって王様たち顔はヨーロッパっぽいけどきてる服アラビアっぽいよ？

ヨーロッパな雰囲気顔のアラビア服きてるとこみてるとなんか複雑な気分だよ？

ご飯か…

というわけで食事タイムです。普通に机でした。良かった。これで地面に座って食べるとかだったら拗ねる。日本人だけど拗ねる。

そんなこんなで食事が運ばれてきたけど。

……なにこれ。

おかゆ？お母さんがよく風邪をひいた時に「おかいさんたべなさい、消化にいいから」って持ってくるあれ？でもなんか匂い違うよ？

おそろおそろ口に含む。

甘い…やばい甘すぎる。どれくらい甘いかってお汁粉に生クリームと練乳とグラニュー糖これでもかかってくらいいつめこんでそこに餡子とチヨコレート乗っけるくらい甘い。

塩気を、誰か塩気をよこせ！

スイカにかける塩しかり、お汁粉につける塩昆布しかり、小倉トーストのバターしかり、甘いものには塩気がいるんだよおおお！！

失礼かもしれないし食事にケチつけるのあんま好きじゃないけど、これは甘すぎる。

口に含んだ時点で吐き気がして、飲み込むと喉がいがいで、さらに頭痛までしてきた。なんなんだこれなんなんだこれ！

おかずは？おかずくらいはしょっぱいもの出るよね？

おかずが運ばれてきて、私の心からボキッと音がするかとおもった。

……………もつやだ。

鮭…？の切り身みたいなのにこれでもかっけくらい緑の粉かけて揚げたみたいなの、磯辺揚げののりしかみえないバージョンみたいなのにかがでてきた。

食わず嫌いはいけないとおもって、フォークで切ってみると、断面がかなり緑色。

赤福って知ってる？あの伊勢土産の餅を餡子でくるんだ奴みたいなの。あれの餡子くらいの分厚さで緑色の部分がある。

ぶっちゃけ食いたくねえ。

しぶしぶ口に含むが、食感が何かこう…筆舌に尽くし難いって感じ。音がね、「ジヨ…バリバリバリ、バキッ」って鳴るの。

砂の入ったアサリを噛んだあとに、なんかクラッカーみたいな硬さの層があって、その下に 骨みたいなのがある感じ。

食感自体はまだギリギリセーフにしてやれる。

でもさ、味が、焼いたピーマンの苦いのと、熟してぐちゅぐちゅのトマトの酸っぱさと、脂っこさと、また砂糖。甘い。

…なんでこの国の人生きていけるの…？

お母さん、初めてあなたのご飯が絶品だと思いました。

## セイザってつらい(前書き)

短いです。タイトルが考えつきません。  
何がやりたいのかわからなくなってきました。時間がない。

## セイザってつらい

くっ…「セイザ」というものはここまで恐ろしい物なのか！

黒のお嬢さんに笑顔で足を攻撃され、反撃するにも防御するにも足を襲う激しい痛みが邪魔をする。

今まで受けてきた刀傷や打撲だったら慣れていたから動けただろう、しかしこの「セイザ」という物は今まで経験したことのない不思議な痛みを私の足に与え続けるのだった。

風呂から彼女が上がり、やっと開放されると思い立ち上がるうとしたら、足の感覚が全くなくなっており、激しくこるぶのだった。

足に力を入れ、物に当たるところんだ痛みとは比べ物にならない痛みが全身に駆け巡る。

もしや彼女はこちらへくる前、尋問官でもしていたのだろうか。だからこんなに恐ろしい刑罰を思いつくのだろう。

床に足を折り曲げて座らせ羞恥と苦痛を与え、立ち上がると足に力が入らなくなるようにすることで逃亡を防ぎ、その上その後も触られたり叩かれたりするだけで足を痺れさせるなんて！

いままで反逆者にやってきた拷問がひどくぬるい物に思われてきた。鞭打ちよりきついのではないか…？

…それよりも私は彼女にそんな事をされるほど酷い事をしたか！？

あれか、嫁入り前の娘に無断で添い寝した事か？あれは不可抗力だ！

…不可抗力だ…、よな？

食文化の違いは夫婦仲の不調に最も大きな影響を与えるものだと思われるので彼  
タイトル、長いですね。長くしたかったんです。私が1番夫婦仲の  
不調につながるのは食文化の違いだとおもいます。

**食文化の違いは夫婦仲の不調に最も大きな影響を与えるものだと思われるので**

その後も彼女の心ゆくまで足を虐めたおされているとご飯の準備ができたと言われた。

彼女はお腹が空いている事に気づかなかったのだろう、おなかを触っている。

何かを思い出すかのように宙を見つめていた。そのあと、何かを思いついたかのように目を見開いて、顔色を暗くした。

彼女はなにを考えているのだろう、その悩みを聞いたら全力で取り除くために動くのに。

そのあと、何かを決意したような顔になり、さらに怒ったような顔になり、周りをキョロキョロ見回したあと私をじっと見つめていた。

な、なぜ？ものすごく照れるのだが神秘的な大きい黒い瞳に見つめられ、目が離せない。見つめあっていたのはほんの少しの間だったが、物凄く長い時間に思えた。

そのあとふいつと逸らされた時に残念に思ったのは内緒である。

食事をすると言う事で机と椅子の所まで移動したが、彼女は机と椅子をみた途端にほっ、と息を吐いた。

彼女の世界では椅子と机が一般的だったのだろう、見た事もない彼女の故郷に似た食事作法だといいいのだが。

出す料理は、昔召還された黒のお嬢さんが故郷の料理の話を書かれた時にいつておられた『イソヴァーゲ』と『オクアウ』を出す事にした。彼女の故郷と同じ世界ではないかもしれないが、少なくともこっちの世界のものよりも向うの世界のほうが彼女の故郷のものに近いかもしれないからだ。

しかしコックに言わせると「絶対に美味しくないと思う、なんなんだこの料理」らしい。もしかしたら異世界と言うのは味覚も違うものなのだろうか。

料理を見た瞬間、彼女は困惑した表情をした。彼女の周りのものは「なにこれ食べ物？」と言ったような顔をしているのに、迷わず食べようとするのだからきっと彼女の故郷にも似たようなものがあるのだろう。

彼女の世界ではなにを食べているのか気になったので、私も同じものを食べる。

……異世界の彼女とは味覚があわなさそうだ。

と思っていたら彼女の眉間にサツ、とシワがよった。やはり彼女は私達と同じ味覚をしているのか、そう期待するがすぐ表情は戻りもくもくと口に運んでいた。私は一口めで死ぬかと思ったのに彼女は食べ続けている。

さらに料理が運ばれてくるが、なんなんだこれはと思った。

真緑なのだ。食べ物なのに。

彼女はそれでも臆する事なく、フォークを突き刺し食べ進める。彼

女には悪いが今度から料理は別のものを出してもらおうかと思っ  
ていると、彼女の目からぼろりと涙がこぼれた。

そんなに故郷が懐かしくなったのだろうか、おろおろしながら彼女  
の傍へより、目の涙をぬぐってから頭を撫でる。

これで帰りたいなどと言われたら私が泣くかもしれない。

たった会って一晩なのに私は彼女が何より大切になっていた。

胸の中の彼女が、ポツリとつぶやいた。

「…まずい」

良かった、彼女とは気が合うかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7032y/>

---

黒い眠り姫と恋しましょう

2011年12月16日17時56分発行